戦争を知らない君たちへ

太平洋戦争中、最も過酷な戦いといわれた「パプアニューギニアの戦いの末路」と思われる写真集を贈られました。戦争というこの世の最悪な行為の最後をまざまざと見せつけられた思いです。

わたしがこれから申し上げるのは、ニューギニアでの実際の戦争に参加した一人として、身をもって体験した者の、心からの言葉です。戦争を体験されていない方は、戦争がいかに悲惨であるかを知っていただきたいと思います。

わたしは二十一から二十二歳の青春時代を戦場で過ごしました。

昭和十八（一九四三）年七月三十日の夕方、アメリカ・オーストラリア軍の大砲が東部ニューギニア・サラモア[7]の、わたしたち陸戦隊の基地に撃ちこまれました。それは基地の中にあった大きな熱帯樹を直撃して、その周りで休んでいた十五、六人の隊員を、こっぱみじんに吹き飛ばしてしまったのです。わたしも直前までその場にいましたが、たまたま書類を持って防空壕に入ったため、ほんの一、二秒の違いで命を落とさずにすんだのでした。

それがすさまじい攻撃の始まりでした。

翌日からは毎日、この長距離砲が撃ちこまれました。しかし、わたしたち日本軍の大砲は小さくて、その距離には遠すぎて届かないのです。

どうにもなりませんでした。

日中、次々とおそってくるアメリカ軍の航空機ノースアメリカンB25やロッキードP38の銃撃と激しい砲撃に、わたしたちは追いつめられていきました。だんだ

んとサラモア半島の先端の、奥深いジャングルへと追いこまれていったのです。

八月に司令部から、「後方の基地に移動するように」との命令が出ました。

もう、ジャングルの中のサラワケット高峰[8]をこえて、はるかなキャリ[9]へと向かう以外に方法はありません。しかし、そのジャングルは、まさに天にも届くような大木の、海のように続く所です。うっそうと生いしげる熱帯の樹木に行く手をふさがれ、道などあるはずもありません。まるで、はいずるように、熱帯の樹木を切り開きながら進みました。まともな食料はとっくになくなり、何ひとつ食べるものはないのです。木の根や草の根を食べるしかありませんでした。来る日も来る日もそんな極限の状態で、敵の攻撃にさらされながら、わたしたちは歩き続けました。

ラエ[10]を出発して三十九日目の夕方、やっと第一の目的地サラワケット山頂（標高四千百メートル以上）に着きました。熱帯のニューギニアとはいえ、これだけの高い山になれば、猛烈に寒いのです。想像を絶するような寒さです。もちろん、温度計など持ってはいませんでしたが、おそらく零下二十度くらいではないかと、わ

たしたちはふるえながら話し合いました。全員が半そでシャツに半ズボンという、熱帯地域の海軍の服装でした。ですから、その寒さは痛いほどで、体が切られるようでした。

するとだれかが、それまで肌身はなさず持っていた銃の、木の部分を燃やし始めたのです。わたしたちは次々に火中に自分のものを投げ入れ、火の周りを囲みました。

けれども、兵器をなくす行為というのは絶対にしてはならないことでした。天皇陛下の菊の御紋章がついている銃を、暖をとるために燃やしたとなれば、当時は確実に死刑にされることでした。そのため、隊員の中にはどうしても銃をはなすことができず、火からはなれた場所で野営した人も多くいました。

しかし、何ということでしょう。翌朝気がついてみると、その人たちは一人残らず全員が凍死していたのです。わたしたちは一睡もせずに、火の周りで軍歌を歌い

※野営……戦場で、野外にテントなどをはって、寝ること

ながら夜を明かしたため、生き延びることができたのです。
本当にむごく残念なことでしたが、かれらにとっては、正しいひとつの道を選んだのだと思うほかありませんでした。
さあ、これからいよいよ絶壁のサラワケット北壁を下りなければなりません。生き残った部隊を集合させた少佐は、
「貴様たちは昨夜、天皇陛下の菊の御紋章の入った小銃を火中に投げ入れて灰にするという、してはならないことをしてしまった。もし、このことがほかのものに知られたら、全員が死刑にされることはまちがいない。だから生きている間、このことをほかに話すことは絶対に禁止する」
と言いわたしました。
凍死した多くの戦友たちをそこに残し、サラワケットの北壁をゆっくりと、足元をふみしめながら下りました。そして正午過ぎ、ようやく下の谷川までたどり着きました。厳寒の山頂から、また熱帯のジャングルへともどったのです。

それからは毎日、ジャングルの中を植物にのみこまれるように、もがきながら進みました。五十五から五十六キロほどあったわたしの体重は、三十七キロほどに落ち、死と隣り合わせの苦しい日々でした。

五日くらいたったときでしょうか。やっとの思いで、目的地のキャリへ到着することができました。しかしこのとき、わたしたちの所属部隊の隊員約三千五百人のうち、生き残ったのは、何とわずかに二百九十三人になっていたのです。

この山では、陸海軍の兵隊が何万人も死亡しています。けれどもそのほとんどのご遺骨は、いまだに、故国日本に帰り着いていないのです。戦後六十年近くを経た今も、一日も早く故郷に帰ることを、待ち望んでおられることでしょう。

今考えても、そのときの日々は、わたしの一生のうちでこれ以上ないと思われるほどの苦しいものでした。どんなに言葉を重ねても、言い表せるものではありません。

キャリでは一週間ほど静養できましたが、最終目的地の中部ニューギニアのウエ[11]

ワークまで、今度は船で行くことになりました。三百から四百人くらいが乗れる船をさがしていたところ、三百人ほどが乗れる陸軍の徴用船が入港してきました。話し合いの結果、わたしたちの部隊の生き残り全員が乗れることになりました。

その船の船長は五十歳くらいで、わたしの父が生きていれば、ほとんど同年代くらいの人でした。わたしはふと、父のことを思い出していました。

夕方、船に乗りこみ、ウエワークへと向かいました。

そしてある日、寄港していた港を午後二時ごろに出港しました。ニューギニアの沿岸近くは、攻撃をさけるため夜間しか行動できませんでした。けれども、もうウエワークに近づいたので、今日は早く出発するのだろうかと思いました。

そのとき突然、遠く西北西の空の入道雲の合間に、飛行機の影が見えかくれしました。わたしたちは、久しぶりに仲間の飛行機を見つけたものと思い、全員大喜びで近くに現れるのを待っていました。

※徴用船……民間の船を、軍隊で使うために強制的に借り上げた船

ところがそれは大間違いで、アメリカ空軍の中でも一番の大型爆撃機、コンソリーデッドでした。一同肝をつぶしました。わたしたちの乗った船は徴用船なので、対空用の機関銃など一丁もないのです。敵はこちらが攻撃してこないことを確かめた上で、船の後方四五度の角度にぴったりとつけ、すぐに攻撃態勢に入りました。

この船は民間の船なので、全速力を出しても六ノットほどの速さです。わたしは腹をくくりました。もとより、とうの昔に死ぬことは覚悟していました。ですが、弾丸の撃ち合いでたおされるのでもなく、一方的にこんなかたちでやられるのは、たまらないとも思いました。

わたしは静かに目を閉じました。

次の瞬間、サアーと風を切るような音と同時に、船はものすごい音をあげて激しくゆれました。幸い直撃からまぬがれたと思ったのも束の間、前方へ舞い上がったアメリカ軍機はグルリと回転しながら、またもや攻撃態勢に入ったのです。今度こそ、わたしも最期だとの思いが瞬間的に頭の中をよぎりました。それと同時

に、再び大音響がして、船はひっくり返るかと思われるほど左右に大きくゆれたのでした。続いて二十五ミリ機関砲の砲撃が、ドドドドーッと甲板にふせていた兵隊たちをなぎたおしました。甲板は、たくさんの撃たれた兵隊たちが流した血の海となりました。が、不思議なことにわたしには命中していなかったのです。でも、またすぐに次の攻撃だと身構えました。ところが、爆弾がなくなったらしく、アメリカ軍機は上昇し始め、はるかかなたへ飛び去っていきました。

「助かった…」

生き残った者も、すぐには立ち上がることができませんでした。

ほんのわずかな時間だったのかもしれませんが、このときの緊張と恐怖は、一生、絶対に忘れることができない、まさに悪夢そのものでした。

戦争を知らない人々よ…！

わたしは、あえて言います。

戦争、戦争と簡単な考えで戦争のことを語ることは、大きな間違いです。

戦後半世紀以上、平和な日々が続いている今日、太平洋戦争中に戦闘には直接関係のない民間人が、何十万人も犠牲となったことを君たちは知らないかもしれません。しかし広島、長崎の結末を見ても、犠牲となるのは、何の罪もない普通の人々なのです。

どのような理由があったとしても、戦争とは、この世の最悪の行為であることは絶対に間違いのない事実なのです。

（原作　岡田浩揮「あゝニューギニア危機一髪」）